外来患者の観察を通した多職種役割の違い

○尾崎 瑞・管生 聖子・遠藤 誠之[#]
(大阪大学)

キーワード: 多職種連携, 人工妊娠中絶, コミュニケーションの構造

Discussion about different roles of healthcare team members through observation of an outpatient
Mizuki Ozaki, Shoko Sugao and Masayuki Endo
(Osaka University)

【問題】公認心理師法が施行され, 多職種連携の重要性が説かれている。公認心理師法第42条第1項では公認心理師は他分野の専門家たちとの連携が求められている。さらに医療現場でも医師を初めとする様々な医療専門職が連携するチーム医療の重要性が指摘されおり, 公認心理師は心理学の専門家として, チーム援助のメンバーになる(石隈, 2019)。

産婦人科も心理職による援助が必要な領域であるといえる。人工妊娠中絶や死産などの周産期喪失を経験した母親は, メンタルに不調をきたすリスクが出産群に比べて高まる

(Bellieni, & Buonocore, 2013)。すなわち, 人工妊娠中絶や死産を経験した母親に対する産婦人科は心理的ケアが必要な領域であり, 医師だけではなく, 臨床心理士や公認心理師(以下, 心理職とする)も加わった多職種連携が重要であると考えられる。

以上のように, 心理職を含めた医療専門家の間では多職種連携の重要性が認知されているが, 患者(クライアント)側からは多職種の役割がどのように異なるものとして捉えられているのだろうか。あるいは, 患者に対してどのように異なる質的作用を及ぼしているのだろうか。

【目的】多職種が連携した医療現場における心理職の役割を考えるために, 患者にとっての医師と心理職の役割の違いについて検討する。

【方法】大阪大学医学部附属病院胎児診断治療センターでは, 心理職がカウンセリング外来を開設し, 産婦人科医師による診察と並行して2年前より人工妊娠中絶後の母親の心理的ケアに取り組んでいる。発表者は当施設で公認心理師実習の一環として, 産婦人科医師の診察と心理職のカウンセリングの場面で周産期喪失を経験した母親の語りを聞く機会を得た。その中で1名の同一患者の医師の診察と心理職のカウンセリングに陪席し, その際の患者の様子を観察した。今回はその患者にとってのそれぞれの職種の役割の違いについて, 観察した内容をもとに考察した。発表内容については, 大阪大学大学院人間科学研究科教育学系倫理診察委員会(受付番号19002)及び大阪大学医学部附属病院観察研究倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号17223)。なお, 本研究では対象となる母親を「患者」という表記で統一する。

【結果】医師の診察の際には患者はハキハキと話し, 医師と患者という二項関係でのやり取りをしている様子であった。医師から質問がないか尋ねられた際には, 気になっていたことをすぐに尋ね, 医師から助言を受けていた。全体的に患者自身が話すというよりも, 医師の話を聞く姿勢が強かった。一方で, 心理職とのカウンセリングの際には患者は自身の内面に目を向け, ゆっくりと考えながら話していた。患者, 患者の内面, 心理職の三項関係があるような印象で, 患者は自分の中から湧いてくる言葉を紡いでいる印象であった。心理職の話を聞くというよりも, 患者が自身のことについて漠然と抱いていた感覚や感情について意識を向け, 言語化してゆく姿

勢が強かった。

【考察】観察の結果から, 患者にとっての医師と心理職の役割の違いは以下のように考えられた。医師の診察の際には, 患者は医師との間でハキハキとやり取りを行い, 患者がたくさん話すというよりも, 医師のアドバイスを聞く姿勢が強く見えた。このことから, 患者にとって医師の診察とは, 患者がすでに意識化し明確に言語化できた事柄について出てきた疑問や不安に対し, 医療に関する専門的な知識を教えてもらう場所として機能していると考えられた。検査の結果や, 身体の不調があればそれにどのように対処すればよいのか説明を受ける場となっているようであった。一方で, 心理職によるカウンセリングの際には, 患者はゆっくりと話し, 自身の内面に目を向けている様子で, 患者が自身のことについて話す姿勢が強く見られた。このことから, 患者にとって心理職のカウンセリングとは, 心理職からの問いかけをもとに, まだ言葉になっていない感覚や感情に意識を向け, それがどのようなものであるのか自身の内面に向き合う場として機能していると考えられた。心理職から必要な心理教育を受けながら, 自身の感情や気持ちを言語化したり, 改めて想いを巡らせることで, 整理する場となっているのではないだろうか。

以上のことから, 患者から医師と心理職に求めている役割が, あるいは, 患者に対して医師と心理職が及ぼしている作用がそれぞれ異なっていることは明らかである。多職種連携やチーム医療の重要性が心理職の中で説かれているが(石隈, 2019), 本研究の観察により, 患者側からも心理職と医師との間では役割の質に違いがあると認知している様子がうかがえた。本研究は1事例の検討であるため, 今後複数事例についての検討も必要であると考えられるが, 患者にとっての医師と心理職の役割の違いがあることが示唆された結果となったといえる。また, 他職種のスタッフにも, チームの中で心理職がどのような役割を担い, どのように患者のケアに役立っているのか認識を深めてもらう一助になると考えられる。本研究では産婦人科外来での観察・検討の結果であったが, 他科においても同様に専門職ごとに患者から求められる役割が異なっているため, 患者の様子を観察したり, 話を聞いたりする中で患者のニーズをくみ取り, 多職種連携によるケアを行っていくことが重要であろう。そして, 患者のニーズを満たすためにも, 医師によるアプローチと心理職によるアプローチを適宜組み合わせ提供することが求められると考えられた。

【引用文献】Bellieni, C. V., & Buonocore, G. (2013). Abortion and subsequent mental health: Review of the literature. *Psychiatry and clinical neurosciences*, 67, 301-310.

石隈 利紀 (2019). 情報共有 多職種連携・地域連携 子安増生・丹野 義彦 (編) 公認心理師エッセンシャルズ第2版 (pp.68-69) 有斐閣